

新規検査内容のお知らせ

謹啓 時下益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。
平素は格別なご愛顧を賜わり厚くお礼申し上げます。
このたび、血液一般検査におきまして、新しい測定可能項目が準備できましたのでご案内を致します。
今回の検査項目は、研究項目となっておりますが、各先生方におきましては診断の補助項目として有用性が報告されている項目です。
今後ご活用頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

謹白

記

- 検査開始日：2023年6月19日（月）ご依頼分より
- 検査項目：幼若血小板比率（Immature Platelet Fraction%；以下 IPF）

※研究項目のため、参考値としてご報告致します。

※保険点数はありません。

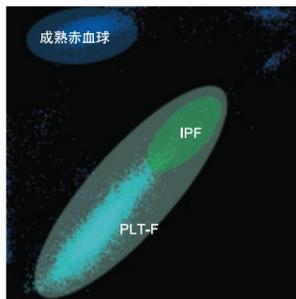
コード	検査項目名	検査方法	基準値	所要日数
0399	IPF	フローサイトメトリー法 (FCM法)	1.2~5.9% ※	1~2

※シスメックス株式会社 臨床参考基準範囲より設定

(注) 検査依頼の際は、末梢血液一般検査を同時に参考値報告致します。

IPF測定に関する情報

前方散乱光強度



側方蛍光強度

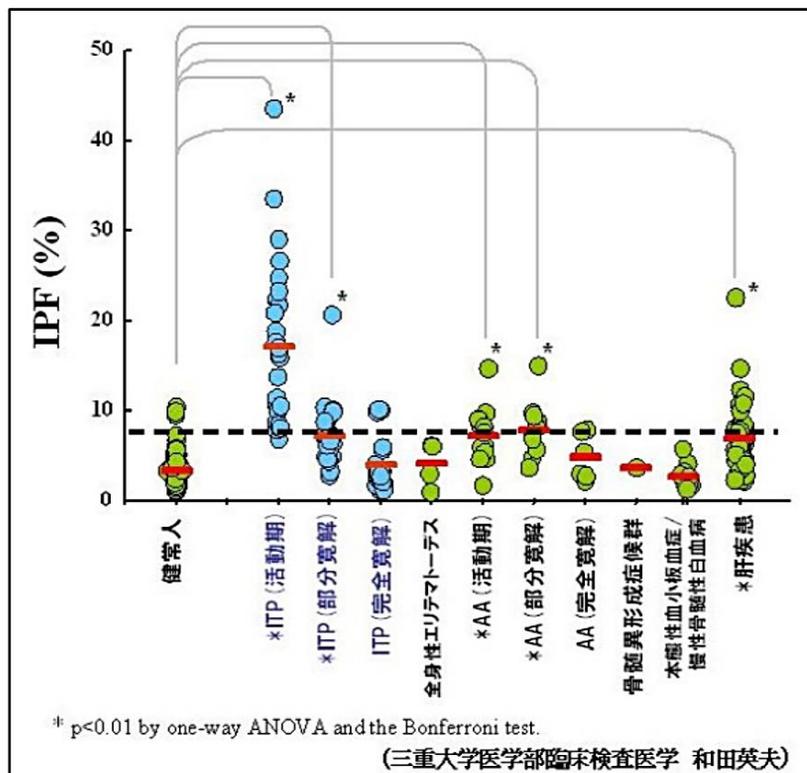
IPF測定は、通常血小板数を測定するPLT-Iチャンネル（電気抵抗式血小板）ではなく、PLT-Fチャンネル（蛍光測定血小板）で測定します。PLT-Fチャンネルでは、血小板を選択的に染色しFCM法で測定しています。また、蛍光強度の強い領域をIPF（Immature Platelet Fraction）として分画します。前方散乱光と蛍光強度の違いにより、血小板とそれ以外の血球を明確に区別します。この方式によって得られた血小板分画は破碎赤血球や小型赤血球の影響を受けにくく、PLT-Iチャンネルに比べて約5倍の血小板を計測することで、血小板低値検体も精度良く測定できます。

各種疾患とIPFについて

幼若血小板比率（IPF）は、血小板減少症における診断補助項目として有用とされています。血小板減少症の原因としては以下の3つがあります。

- (1) 骨髄産生の低下（AA：再生不良性貧血や化学療法における骨髄抑制など）
- (2) 末梢での破壊亢進（ITP：特発性血小板減少性紫斑病など）
- (3) 血栓形成による消費の増大（TTP：血栓性血小板減少性紫斑病、DIC：播種性血管内凝固症候群など）

血小板減少を認めた場合には、これらを鑑別する上で骨髄における血小板の産生能を反映していると言われるIPFが有用なパラメータと考えられています。



< 健常人と各疾患のIPF分布 >

幼若血小板比率（IPF）は、健常人と比較して、ITPにおいて有意に高値となっています。一方、その他の疾患では、健常人と比べて有意差は認められません。このことから、ITPでは骨髄の血小板産生が亢進していることが示唆されます。

※シスメックス株式会社 HPより参照